

医療制度や介護保険制度がめまぐるしく変化するなか、効果的なリハビリテーションを完遂するには、保健・医療・福祉分野の様々な職種が、共有する目標と理念に照らした連携アプローチをいかに展開するかがポイントとなる。急性期病院、回復期リハ病棟といった病院の機能分化が進行するほど円滑な連携が重要となり、さらに介護保険制度下の諸サービスを利用者主体の在宅支援に直結するには、理学療法士が積極的に連携の橋渡しを担う必要がある。そこで本号では医療機関、介護老人保健施設、在宅理学療法における連携のあり方について論じていただいた。

■リハビリテーション領域における連携の現状と課題(飯島 節論文)

介護保険制度の施行や医療制度改革にともない、リハビリテーションの様々な分野で連携のあり方が問題となっている。医療機関の機能分化や医療保険と介護保険との役割分担が進む一方で、リハビリテーションには連続性が求められており、地域における連携体制構築が課題である。

■急性期病院からみたリハビリテーション連携の現状と課題(内田奈々, 他論文)

医療制度が刻々と変化する中、地域医療連携の強化が重要視されており、当院が所在する熊本県においては、専門高度化した各医療機関が連携をもって地域で医療を完結する、地域完結型医療体制が整備されている。本稿では、当院が現在取り組んでいる理学療法士病診連携会議の実情と、良質な医療連携の実現を目指して作成した、地域連携クリニカルパスについて紹介する。

■回復期病棟からみたリハビリテーション連携の現状と課題(島村耕介, 他論文)

回復期リハ病棟は、急性期から在宅への橋渡しを行うことが使命である。それらのためには院内での多職種間での連携、急性期・維持期との連携が必要であり、様々な工夫が求められる。前者に対しては、病棟専従体制やマトリックス組織などの運営面で、後者に対しては、サマリーを全職種共通のものにするなどの工夫をしている。また、連続性をもった理学療法を展開するために、ケア場面や維持期サービスの体験などを通してスタッフのスキルアップを図っている。

■介護老人保健施設からみたリハビリテーション連携の現状と課題(小笠原 正論文)

介護老人保健施設は、医療機関から在宅への中間的施設、在宅サービス提供の中核的施設としての役割がある。介護老人保健施設における連携を考える上では、急性期、回復期リハのステージ、および維持期リハにおける在宅サービス機関との強固な連携システムの構築が望まれる。この中で理学療法士は多職種協業や、関係機関との情報の共有をはかり、幅広い視野で業務を行うことが期待される。

■地域在宅におけるリハビリテーション連携の現状と課題(隆島研吾, 他論文)

リハビリテーションは本来継続的なものであるが、時系列に医療保険制度、介護保険制度、障害者自立支援法などによる具体的なサービスを組み合わせていく必要がある。そのためには、ケアマネジャーやソーシャルワーカーなどの調整役が必要であり、理学療法士もその制度については知っておかなければならない。今回は病院と地域の連携で自宅生活の定着をみた症例をもとに、地域でのチームのあり方について、その実際と課題について述べた。